

耳のすぐ近くで人の呼吸音がした。浅く、早く。興奮してるようだ。どうやら私は仰向けで寝かされ、誰かに観察されているらしいと東雲静馬は閉じた視界の中で考えた。いったい誰がそんなことを。当然の疑問を解消すべく目を開けようとする。だが眼球と瞼の間に接着剤を流し込まれたかの如く瞼は開かない。意識は目覚めてるのに身体は眠ったまま、そんな感じだ。

深い眠りから覚める途中で意識が肉体を置き去りにしてしまうことが往々にしてある。本来は心と身体が揃って覚醒せねばならないところ、心ばかりが起きてしまうので気がついてるのに身体は動かせない。その現象を説明するため大昔の人は金縛りという言葉を作った。だとしたら心身のズレは時間が解決してくれるはず。しばらく待って肉体の覚醒が意識に追いつけば金縛りは解ける。問題はその時間を待つ余裕があるかだ。

誰なのかしら。人の耳元で鼻息を荒くして。まさかにおいを嗅いでるの？

優れた魔術師であると同時に静馬は女子高生。年頃の女の子が体臭を味わわれて平静ではいられない。いったい相手は何者なのか、自分はどこにいるのかと身動き取れないまま

頭はフル回転。

天才的な頭脳で現状を説明しようとした静馬の試みは、不意に耳をくすぐる濡れた肉の感触に断ち切られた。

舐め……っ！ まさか今、耳を舐められたの……んっ、そんな……繰り返し……っ！

静馬は幼少期に飼っていた犬のクロを思い出す。あの子も飼い主の顔を舐めて起こそうとしてくることがあった。早く起きて遊んでよと催促してくるクロの気配に起こされるのは嫌いじゃなかった。

しかし今、静馬の耳を舐める何者かは断じて無邪気な子犬ではない。

舌先が丁寧に静馬の耳殻を舐る。耳の輪郭を舐め回し、溝の内側に入り込み、穴まで尖らせた舌先を入れてくる。耳たぶは唇ではむはむと啄まれ、軽く歯を立てて軟骨がコリコリされる。

何者かの耳いじりは明確な意図があって行われていた。それが何であるか、異性との性経験がない静馬にも分かる。

愛撫。ペッティング。

そういった名前で呼ばれる類の行動だ。この相手は静馬に性的な刺激を与えてくる。それによって彼女の身体が何らかの反応を見せると期待してのことだろう。それならば静馬

にできることは肉体の覚醒まで無反応を貫くこと。感じたりしないことだ。そして身体が動くようになったら即座に相手をボコボコにする。

そう決意したそばから静馬は快感に打たれた声を漏らす。

「んうっ、んっ」

相手の舌使いは巧みだった。的確に弱点を攻め立ててくる。唾液をたっぷり絡めた舌が耳穴を蹂躪するズボズボ音が腰に響いた。

「ふ……」

熱い吐息を吹きかけられた。静馬は身を震わせる。その様子を面白がる「クスッ」という笑い声があった。

馬鹿にして！ 静馬の反骨心に火がついた。寝込みを襲われ身体をいよいよにさせているだけで屈辱なのに、このうえ感じてる姿を笑われるなんて。

静馬は男を突き飛ばそうと腕に力を込めた。金縛りが解けているか半信半疑だったが腕は彼女の意思に従って動く。

しかし。

——ガコツと音がして腕はゆるく肘を曲げた状態から動かない。そこで初めて静馬は自分の両腕がベッドに縛り付けられていることを自覚した。両脚も足首がベルトでベッドに固

定されている。膝を軽く曲げられる程度の遊びはもたせているが、脚を閉じることはできない。危険を感じた肉体が急速に目覚める。危機から脱出せよと訴える。アドレナリンが放出して心臓の鼓動が早まった。

くっついた眼球をベリベリっと剥がして瞼が持ち上がる。

「どこなのかしら」

目の前には見慣れない天井。地下室？ コンクリートが剥き出しになって寒々とした印象を受けた。電気は来てるらしくLED電球の真っ白い光が網膜に突き刺さる。

「静馬ちゃん起きた？」

眩しさに顰めた顔のそばで男の声がした。天井と静馬の間に横から見慣れぬ顔が割って入る。年齢は静馬より何歳か上。二十代半ばくらいだろうか。至近距離で見下され不快感を催す醜男ではないが特筆すべき点もない。見た者が十中八九桁外れの美少女と答える静馬と比較すると平凡の一言。

「ここはどこかしら。あなたは何者。何のために私をさらったの」

一瞬で静馬は目の前の男に拉致され、彼のアジトに連れ込まれたらしいと察した。そのうえ彼女はすべての衣服を剥ぎ取られている。自分を拉致したらしい男も裸だ。仮に静馬が単なる女子高生であれば激しく動揺し何も考えられなかったろう。しかし彼女は修羅場

を潜ってきた魔術師である。窮地するときこそ冷静に情報を集める重要性が分かっていた。

「もっと狼狽えてくれるかと思ったのに。起きてすぐ情報収集か」

期待したのと違うと男はつまらなそうに言った。

「泣き叫ぶ女の反応が見たいなら相手を間違えたわね。今ならクーリングオフできるわよ」  
静馬の受け答えに男は首を横に振る。

「せっかく捕まえたのに返すなんてもったいない。静馬ちゃんには俺の魅力を全身で感じてもらおうよ。そのために邪魔なものも全部脱がせたんだから」

男の手が静馬の胸をつかむ。遮るものがない肌と肌の接触。

「やめなさい変態！」

静馬は反射的に男の頬を張り倒そうとする。ベッドに括られたベルトが限界まで伸びる。革製の手錠が手首を締め上げた。

「いきなりの暴言！ これはこれで興奮するシチュエーションだ」

「ちっ」

相手が罵倒されて喜ぶ変態なら言葉での抵抗は無意味。興奮要素にしかない。静馬は舌打ちし、次はどうするか思索する。

「さっきの質問に一個ずつ答えてあげよう」

男の手がゆるゆると動き静馬の胸を揉む。スレンダーな彼女のポリューミーとは言えない胸。天上の美と引き換えにコスト削減されたと思しき薄い胸部を男の手が刺激する。

「ここがどこか。正確な場所は教えられないが俺の家だ。見てのとおり地下室だから多少うるさくした程度では外まで聞こえない。気持ちよくなったら遠慮なく声を出してくれ」

「ふう……んっ……いらぬ心配ね……そんなこと、ありえないわ……ふぁッ、んう……ひゃうっ」

男の指先が乳首をクリクリする。初めて感じる他人の指。意図せず可愛らしい女の子の声を出してしまう。こんな声、ダメなのに。すっかりしないとイケないのに、この男……。「うまいだろ。処女の静馬ちゃんと違って俺は経験豊富だから。安心して任せな」

「うっ、くう……そんなの……ひうっ」

「ほら両乳首ぎゅーってしてあげる。静馬ちゃんMっ気ありそうだから気持ちいいでしょ」  
「う、ああ！　ち、ちが……ッ……んくッ！　そんな、こと……ッ！」

「少し痛くされるくらいが気持ちいいんだろ」

乳首を抓りあげられるとヘソの下が熱くなる。火傷した後のようにじゅくじゅくと疼いた。

「なによこれ」

首を限界まで下に向け己の腹部を見た。見慣れない紋様が刻まれている。男が乳首を抓るのに合わせて暗いピンク色に光った。そうすると紋様のある場所から知らない感覚が湧く。紋様で発生した未知の感覚は静馬の秘部に降りてくる。未だ汚れ知らぬ乙女の小道。誰も踏み込んだことのない蜜道の奥深い場所が、紋様の作用によって激しく揺さぶられた。

「な、なに？ おなかつ、おへソつ、んあ、な、に、これっ」

「おへソだけかな。本当はもつと違うところが変な感じするんじゃない？」

たとえば、ここに男が手のひらで静馬の腹部を押した。ゴリッともグリユッとも表現できぬ感触がしたかと思うと、ピンポイントで臓器が押し潰される。

「ひあ、あああ！ なにこれっ、こんななのっ、うそよっ、ひんっ！ こ、これは、あたっ、ひっ！ あがっ、あががががっ！」

男の手は大きな円を描く。お腹の上から深部をマッサージするように揉み込まれた。

「あつ、ひッ……や、やめなさいっ、それはっ……」

男の手は静馬の子宮を責めていた。身体の外からお腹を押されているだけ。それなのに甘美な官能に子宮が蕩かされる。静馬は脚を閉じようとする。しかしベルトが限界まで張り詰めても内ももはくっつかない。

「まだ膣内を触られたわけでもないのに気持ちいいだろ」

「なんてこと、ないわ……触られ慣れてないから、くすぐりたい……だっけええ……はあはあ」

精一杯の強がりをも男は鼻で笑う。

「質問の答えを続けようか。俺が何者かだけど一応は魔術師かな。静馬ちゃんからしてみたら存在も知らない取るに足らないカスだろうけどね」

「カスなんて名乗るのも烏澁がましいわ。あなたと同列視されたらドブ川に浮かんでるネズミの死体だってかわいいそうよ」

「言ってくれるね」

この期に及んで静馬は減らず口を叩く。相手を挑発したら余計なことまで口走ってくれないかと期待して。だが男は少女の喧嘩腰な物言いにまったく乗らない。じゃれつく子猫をあやすようにお腹を撫で続けた。

「最後の質問は何のためにさらったかだっけ？ 言わなくても分かるだろ。密室に男と女が一組。女は裸でベッドに縛られている、男は女に淫紋を刻印したうえポルチオを刺激しながら、早くも彼女を犯したくてちんぽパッキバキに勃起させてる」

膝立ちになった男は自分の股間を静馬の顔に近づけた。視界を埋め尽くすのは初めて見る男性器。こんなに大きいものなの！ 静馬は目の前の肉棒と己の腕を見比べてしまう。同



じくらしいの太さがあるのではないか。長さも自分の顔を縦断できそうなくらいある。張り詰めた太茎は表面に血管が浮かびデコボコしていた。

「これが欲しいだろ。素直になりなよ」

男の陰茎が静馬の頬に触れた。生温かい感触と男臭さが生命の息吹を感じさせる。眼前の男根が生きた人間の一部分であると否が応でも伝えてくる。

「汚らしいものを近づけないで」

キツと睨んで静馬は顔を背ける。強気な態度を崩さない彼女だが心中は穏やかでない。無理、絶対無理、こんなの入らない。四肢を拘束され脱出の目処は立たない。魔術をしようとするが魔力はすべて淫紋に吸い取られてしまう。

現実的な判断として、このまま辱めを受けることも覚悟せねばならない。そうなったとしても卑怯者には絶対屈しないと静馬は決意したはずだった。しかし初めて見る男性器の雄々しさに少女の決心は揺らぐ。

あの凶悪なまでに太いペニスが自分の膣内に挿入されるところを想像する。あれが子宮まで届いたら。ゾクリとした快感が全身を駆け巡る。怖いはずなのに身体の奥底から熱いものが溢れてきた。

あんなモノを受け入れても果たして私は私でいられるだろうか。正気を保てるか。にじ

り寄る敗北の気配に静馬の表情が陰る。

「淫紋の効果で発情してるはずなんだけだな。普通の女の子なら犬みたいにお尻振って自分から挿れてくださいって頼んでる頃合いなのに。静馬ちゃんの精神力には敬服するよ」

男は静馬に背を向け彼女の顔を跨いだ。生暖かく柔らかい陰囊が少女の可憐な唇を塞ぐ。押し付けられた男の秘部から逃れるため静馬が顔を横に振りたくると、男が嬉しそうに「おっ、おっ、おっ」と声を出した。

「静馬ちゃんの顔で玉ぶるぶるされるのきもちいい。お返しに同じことしてあげる」  
視界いっぱい男の股間が広がる中で静馬は気配だけで彼の動きを探る。男は上体を倒し、静馬の腰を両腕で抱え込む。彼の鼻息を敏感な肉花卉に感じた。

見られてる！ 私のアソコ至近距離で。  
「ほらほら暴れないの」

少女の抵抗を男が腕力と体重で抑え込む。魔術が使えない静馬が成人男性の力に敵うはずもない。男の親指が割れ目の両サイドに掛かり、くばあと広げてくる。奥ゆかしく閉じた部位をご開帳され、自分でもじっくり観察したことがない奥の奥まで強姦魔に見物されているのだ。舌を噛み切って死にたいほどの羞恥心が静馬の身を焦がす。

しかし一方で、これから犯されるのだという期待が静馬の中で膨らんでいく。男を罵倒

していたはずの口からは甘い吐息が漏れた。

「ひう……ああ……」

「お腹を撫でてあげただけなのに濡れてるね。男の人に見られて興奮しちゃったのかな」

男の態度も言葉も厭味ったらしい。

「淫紋のせいよ。これがなければ」

「興奮してること自体は認めちゃうんだ」

ああ言えばこう言う。静馬は押し黙った。肉体の反応を観察されながらでは何を言っても嘘と見破られてしまう。

男の指先が淫紋をなぞる。他人に触れさせることなどない場所を撫でられ、静馬の身体がピクンと反応した。

「んっ……ふう……あっ！」

「この淫紋がある限り静馬ちゃんは俺に逆らえない。でも逆らえなくなるのは悪いことじゃないよ。むしろいいことだ」

「どういう意味よ」

「だってさ。静馬ちゃんは今もうすぐ俺の女になるんだよ？ それなのに反抗的な態度を取り続けるなんて失礼だろ。だから淫紋を使って従順になってもらうのさ。そしたら俺は君の

ことを一生大事にしてあげよう」

「誰があなたの女なんか」

男の手が静馬の下腹部から離れていく。そして再び淫唇を開いた。

「ここが静馬ちゃんの処女膜だ。処女喪失は痛いって言うけど安心しな。淫紋にはあらゆる苦痛も快楽に変えてしまう効果あるから。今まで俺のデカチンねじ込んで処女卒業させてあげた女の子たちも、みんな初回から気絶するほど悦んでくれたよ」

「ゲス男」

「心配しないで。優しくしてあげる」

男は静馬の秘部に顔を寄せ、ペロりと舐めた。生温かく湿った感触が膣口に伝わる。

「ひっ」

「静馬ちゃん知ってるかな。この体位はシックスナインと言って本当は静馬ちゃんにも、俺のちんぽ咥えてもらうんだよ。まだ口の中に挿れたら噛まれそうなんで俺が一方的にするけど、そのうち静馬ちゃんも口でできるようになろうね」

「誰がそんなことを」

「はい、おしゃべりはここまで。まずは挨拶代わりのクンニ責めでほぐすよ」

男の舌が割れ目を這い回る。ぴりりと静馬の脳に快感が走った。

「ああああ……」

「おや、静馬ちゃん。気持ち良すぎて声が出ちゃったのかな？」

「違うわ。これは」

「何が違うの？」

強がりなんて無意味だと言わんばかりに男の舌が静馬の秘唇を舐め回した。

ぬめっとしたものに舐め上げられる感触が下半身いっぱい広がる。自分でも見たことがない場所をくつろげられてるだけでなく、舌を入れて味まで確かめられている。非現実的な行為に静馬は身を固くした。

緊張する静馬をあやすように男は何度も割れ目を舌でなぞった。途中ぶるるると顔を激しく左右に振る。先ほど静馬が意図せず男にしてやった動きのお返しだ。

柔らかくもザラつく舌肉の刺激は未体験のものだった。止め処なく愛液が溢れ続ける。

「あむ、ちゅう、んんっ！　ぶじゅう、んちゅう、ぶじゅう、はむ……」

わざとらしいほど大きな音を立てて男が股間に吸い付いてくる。自分の羞恥心を煽っているのだ、身体だけでなく心も辱めようとしてるのだと知っても静馬にはどうすることもできない。快感に跳ね回り、時折ベッドから浮いてしまう腰の動き一つ制御できない無力な少女に、経験豊富を自称するヤリチンのテクニクを我慢することなど叶わず。

「っ、っう、うくっ！　だ、めえ……もう、やめなさ……っ！」

快感を感じると淫紋が熱くなる。焼けるように疼く紋様は快感の増幅器。術者の身体能力を強化し、感覚を鋭敏にする応用で刻印された者の性感を何倍にも高めてしまう。淫紋から広がる快楽の奔流に押し流され、静馬の思考は散り散りとなる。

「ひゃうッ♡　ひッ♡　やめっ……♡　やあッ♡　やっはッ♡　やだッ！」

首を反らして鼻から抜ける声は、我ながら性感に溺れている女のそれだった。音声だけ録音したものを聴かせて誰がレイプ現場と見抜けるだろう。

「気持ちよさそうだね、静馬ちゃん。舐めてると奥からトロトロが溢れてくるのよく分かるよ」

「そん……な、こと……なっ……あっ、や、やだっ……あっ、あっ……！」

たとえ身体の反応で感じていることがバレバレだとしても、言葉で認めることはできない。それを一度でも認めたが最後、私は坂道を転げ落ちていくと静馬は予感した。

男の唇が静馬の内もにもキスする。吸い付かれてチリッと痛みが走った。男の言うとおり僅かな痛みも淫紋が快感に変換して子宮に送り込んでくる。

「あっ……くっ……っう、うう……っ」

「本当はもう気持ちいいことに負けそうなのに頑張ってる姿も可愛いな。静馬ちゃんは全部

可愛い」

まるで恋人を甘やかすように男は言う。

「んんっ……可愛いなんて言われて……あんっ……喜ぶとでも……ふっ」

「事実を述べてるだけさ。静馬ちゃんだって自分が可愛いことは分かってるだろ」

昔から己の容姿が人並み外れて整ってる自覚はあった。そのため誰とも深い関係を築きたくない、誰の記憶にも残りたくない彼女は、見た目で興味を持ってくる人間を突き放すのに苦労させられた。

「初めてなんだ。今までセフレにしたい女はたくさんいたけど、縛り付けて一生そばに置いておきたくなった女は、静馬ちゃんが初めての人だ」

言葉のチョイス、今の状況、すべてが間違ってるのに彼の声音だけは真剣な告白そのものの。

男の腰が浮いて静馬は顔に押し付けられた陰囊の生暖かさから解放された。彼が身体を回転させ少女と向き合う。まっすぐに見下されると静馬は気恥ずかしさを感じた。どういふことかしら。私が照れてると言うの。強姦魔に見つめられて湧き上がるはずがない気持ち。それを静馬は淫紋が悪さしたからだと決めつける。そうでなければ説明がつかない。

「我慢できなくなるまで何時間でも続けられるけど顔も見ながらしたいんでね」

男の唇が静馬の首に当てられる。内ももで感じた痛みが首にきた。首の太い筋肉にちゅっ、ちゅっとリップ音を立てながら繰り返しキスされた。上から下、鎖骨のラインにも口づけの雨が降る。

むず痒い気持ちよさに静馬の唇が震えた。

「んっ、ふ……あああっ」

「静馬ちゃん、俺に抱かれたらどんな風に乱れるんだろうね？ 楽しみだなあ。きっと淫乱になるよ。こんなに感度が良いんだから。想像しただけで興奮してきた」

「あなたなんか私に屈するんですか？」

「そういう女の子ほどセックス大好きに調教しがいがある」

男は楽しそうに笑う。

「これから一晩中淫紋を起動したままセックス漬けにしてあげる。たっぷり可愛がるから覚悟してね」

「んっ……そんな……ひゃんっ♡」

淫紋の疼きは強くなる一方。早く屈して抱いてもらえと身体が訴えてくる。敵は外ばかりでなく内側にもいる。まだ長い夜は始まったばかり。静馬の受難はまだ続くのだった。



「あつ、ああつ、だめつ、そこお……いやあつ」

ベッドに横たわった少女の全身がピクンツと跳ねる。色という概念を忘れて生まれてきたような白い肌に汗が飛び散った。キラキラ光る静馬の身体を男の舌が這いずり回る。汗を舐め取り、唾液の跡を残し、少女の肉体を味わう。無防備に開かれた両腕——その付け根で毛穴一つなく見る者を誘惑する腋窩に男は何度もキスを繰り返した。

「……あ……う……」

手繰り寄せたシーツを握りしめ静馬が弱々しく喘ぐ。細い身体をピクピクと痙攣させる。淫紋による発情状態は続いており、火照った肉体からは絶えず湯気が立ち上っている。その肌の上を男の指が滑っていく。首筋を撫で上げ、耳の穴に指を入れてくすぐってやる。さらに唇へ指を持っていった。少女の瑞々しい唇を指先で弄ぶ。

きつとセックスの経験がない静馬は自分の腋が男に性的な興奮や執着を与えるなんて考えたことないだろう。まして自分がそこを愛撫されて感じるなんて想像の埒外だったに違

いない。

「はあ……んふう……」

半開きになった口から艶めかしい吐息が漏れる。唇の端から涎が垂れ落ちた。彼女の理性はすでに溶け出している。あと一押し。

男が静馬の耳に口を近づけ囁いた。

「静馬ちゃん好きだよ」

「——っ！」

大きく目を見開く少女の前で微笑んでみせる。それだけで静馬は顔を真っ赤にして視線を逸らしてしまった。初心な反応がたまらない。もっと虐めたくなるじゃないか。

男は人差し指と中指を口に含みたっぷり唾液をつけた後、それを静馬の唇にあてがった。

「ほらお口開けてごらん」

「あ……んちゅ……」

少女は言われるままに口を開いた。

「俺の唾液は美味しい？」

「……ふぁ」

かれこれ一時間以上こうして静馬の身体を口と指でほぐしてあげている。最初は反抗的な態度を捨てきれなかった彼女も次第に淫紋の魔力に飲み込まれていった。淫紋を刻まれたから仕方ない、淫紋が自分を墮落させようとしてくるのだと彼女は言い訳を探してるところだろう。敢えて勘違いするように紛らわしい説明をしたが今回の淫紋に対象の心を操る効果はない。あくまで性欲と感度を高めるだけ。

どうでもいい女なら心も操って身体だけ開かせれば満足できる。しかし存外に自分は静馬に本気らしい。美しいだけのお人形さんはいらない。彼女の心ごと性技で屈服させてやりたくなった。

そんな馬鹿な、ありえないと否定してももう遅い。一度快樂の味を知った身体は元に戻らない。あとはひたすら溺れていくだけ。

「そろそろいいか」

男は静馬の両脚からベルトを外した。自由になった両脚が淫紋の疼きから逃れようとシーツの上でバタつく。男が膝を掴んで閉じさせないように固定する。股関節の可動域限界まで左右に広げられても抵抗らしい抵抗ができないまま、静馬は羞恥に耐えていた。感じすぎて四肢に力が入らない彼女のおまんこに再び顔を埋める。戒めを解いても大した抵抗はなかった。

「あつ、ああつ、あんつ、ひうつ、あつ、や、やあ……っ！」

舌の腹でクリトリスを舐める。包皮の上から優しく転がすように舐め回すと、静馬の腰が浮き上がった。腰をくねらせて逃げようとする少女の動きを封じるために両手で太ももを押さえ込む。

「やっ！ いやっ！ もう舐めないでっ！ あッ！ ああッ！ あんっ！ やっ！ やだっ！ やめてっ！ お願いだからっ！ ひッ！ ひッ！ ひッ！ ひッ！ ひッ！ ひッ！ ひッ！ ひッ！」

いくら彼女が優秀な魔術師でも色ごとにおいては初心な子供。おままごのような恋愛ごっこしか経験ない女子高生では、百戦錬磨な大人の本気セックスには太刀打ちできない。ベッドの上では自分たちの力関係はまるっきり逆転してしまう。嫌というほど己の無力さを教え込まれた静馬から最初の気丈さが消え、今では気持ちよくなりすぎることへの怯えが浮かぶ。そんな彼女の表情の変化すら愛おしく思ってしまうのだから俺も末期だなと思つた。

舌先に力を入れてクリトリスを押し潰すようにこねくり回してやる。びくん、びくんと静馬の身体が跳ね上がる。肉付きの薄いお尻がベッドから浮いていた。割れ目の奥にある膣口がヒクつき愛液が溢れ出す。絶頂に近いことを悟ると、男は舌を離してやった。

「はっ、はあっ、はっ、はっ」

激しい運動を終えた直後のように荒い息を吐く静馬。全身汗だくになり肌に張り付いた白髪が妙に艶っぽい。股間を中心にぐっしりとシーツは濡れていた。

「気持ちいい？」

男が聞くと静馬は悔しそうに頷いた。淫紋の反応がある限り嘘についても無駄だった。

「はい」

「素直になれて偉いね。だけどセックスは口や指だけでするものじゃないって分かるよね」

男は股間ではち切れそうになっていた男性器を静馬の秘部にあてがう。

「今度はこっちで気持ち良くなるうか」

「ひっ」

勃起したペニスを見せつけられて静馬が息を呑む。亀頭の前からは透明な汁が滲んでいく。赤黒い肉棒の迫力に圧倒されたのか静馬は大人しくなった。

「いい子だ」

秘裂に勃起したペニスを当てる。恥ずかしいヌルヌルを根本から先端まで塗布しながら素股で刺激した。

「んッ、あッ、くッ、ううッ」

焼けるように熱い媚粘膜に擦り付けるだけで射精欲が高まる。もちろん彼女より先にイクわけにいかない。そんなことしたら格好がつかないではないか。静馬を追い立てるため男は腰の律動を速めた。「くっ、ふうっ、んっ、んんっ、ふうっ、ふっ、ふうっ、ふうっ、ふうっ、ふうっ！」

少女の呼吸に合わせて上下する乳房に手を添える。小ぶりだが綺麗な形をしたおっぱいの先端——乳首を指先で摘んでやる。途端にビクンッと静馬の肢体が跳ねた。

「乳首弱いよね。可愛いよ静馬ちゃん」

男の指先の動きに合わせて、少女の口から甘い吐息が漏れる。硬く尖った突起を指で押し潰しながら、もう片方の胸を鷲掴みにした。小さくてもおっぱいはおっぱい。弾力のある膨らみを掌全体で味わう。

「はあ……はあ……はあ……はあ……はあ……はあ……」

呼吸を乱しながらも静馬は必死に声を堪えていた。もっと乱れてほしい。もっと喘いでほしい。男は静馬のクリトリスに狙いを定めた。器用に腰を使い亀頭で快感の肉芽を虐める。

「ひゃうっ、やっ、だめっ、そこばかり……あっ♡ あっ♡ あっ♡ あっ♡」

「ここ好きなんでしょ？ もっとしてあげる」

「ふわああっ♡♡」

充血して敏感になったクリトリスを弄ばれた少女はあっさりと達してしまった。おまんこの切なさに堪えきれず自由になった脚で膝を擦り合わせた。そうやって脚を閉じたら男のモノとの密着度が増すとまでは考えられない。静馬の滑らかな太ももに締め付けられる気持ちよさで勃起が限界まで尖る。男は休まず腰を動かした。軽いオーガズムを迎えたばかりの敏感なクリトリスを執拗に責め続ける。

「イッてる！ イッてるからあ！ もうやめてっ！」

静馬は涙を流して懇願する。だが男のピストンは少女を無視して続いた。厭だ厭だと口では言うも彼女の言葉に反して蜜壺はどんどん潤っていく。ぬちゅり、と卑猥な水音が鳴った。

「あっ♡♡♡ あっ♡♡♡ ダメっ♡♡♡ またっ♡♡♡ またイひゃうっ♡♡♡ またっ…:ああっ♡♡♡ あんっ♡♡♡ あああっ♡♡♡ あっ♡♡♡」

絶頂を迎えても終わらない快感に少女が絶叫を上げる。細い指先がシートを握りしめて皺を作った。背中が弓なりに反れ、ガクガクと痙攣を繰り返す。

「素股だけでこんなに感じるなんて。腔内に挿れたらどうなるのかな」

ぐったりと横たわる少女を見下ろす。白い肌は紅潮し、半開きになった口から涎を垂らしている。目は虚ろで焦点が定まっていない。もう限界かと思いきや、彼女の性器はまだ

物足りないとはばかりに蠢いていた。卑猥な肉穴がさらなる行為を要求してパクパクする。

「静馬ちゃん淫乱だなあ」

「……違うわ」

消え入りそうな声で少女は否定する。気持ちよくなっていることは認められても、それが自分の淫乱さゆえとは受け入れ難い。これだけ痴態をさらしてもまだ守りたい一線があるらしい。だからこそ墮とし甲斐がある。

「違わないよ。だってほら」

男は指を二本揃え濡れた膣内へ挿入した。ぐちゅっと粘ついた水音が響く。熱く蕩けるような感触に指が包まれる。そのまま中で曲げたり伸ばしたりするたびにグチョッ、ニチャツといやらしい音が響いた。静馬は声にならない悲鳴を上げて悶絶している。

「こんなに濡れてるよ」

「そ、それは……淫紋の影響で……」

「それだけじゃないでしょ」

「ひう……」

耳元で囁くと彼女は小さく震えた。彼女の身体の反応はすべて淫紋のせいと言い逃れられるものではない。魔術師である静馬には魔術への抵抗力がある。一般人に比べて術の効



き目は悪くなる。そうでなければ性的に無垢な女の子が耐えられるはずがない。

「認めちゃいなよ」

男は指で〇スポットを刺激する。同時に反対の手でクリトリスの皮を剥いて直接弄つてやる。最も敏感な二か所を同時に責められ、静馬は堪らず悲鳴をあげた。

「ひいひいっ♡♡♡」

ふしゃっと飛沫が上がる。生ぬるい分泌物で身体を汚されながら男は笑う。俺の責めで感じた成果だと思えば嬉しいもの。もっともっと派手に潮を吹かせてやりたくなる。クリトリスを親指でグリグリとこねくり回す。腔内を中指と薬指でほじくるように刺激する。絡みついてくる肉褻の悦び具合と言ったらない。もう身体はセックスがしたくてしたくて仕方ない。これだけ準備できてるのだ。本音では静馬も男が強引に奪ってくれるのを期待してるのでは。

無理やりされてしまったから、手を縛られて抵抗できなかつたから、魔術が使えなければ男の人には力で勝てないから。そんな言い訳を欲しがってる。そう感じてしまうのは自分のご都合だろうか。

「ふああっ、ああんっ！ あぐっ、んくあああっ！ ああああっ！」

「おまんこくすぐられて気持ちいいね。美少女のお漏らしいっぱい見せて」

「いやあっ！ 見ないでえ！」

① スポットを強めに押すと同時にクリトリスを摘まみ上げる。その途端、ブシュツと勢いよく透明な液体が噴き出した。噴水のように噴射された体液が男の顔にかかる。アンモニア臭がしないから尿ではない。匂いから判断するにこれは愛液だろう。

「ひっ、ひっ、ひいっ！」

絶頂直後の身体に再び強烈な快感を叩きこまれ、少女の喉奥から悲鳴が迸った。もはや嬌声というよりは悲鳴。自分より強いと認めた相手に許しを請う声音だった。

「お願い……許して……ください……これ以上されたらおかしくなっ……！」

「いいよ」

男はにっこりと笑って頷いた。

「おかしくなっ」

そして無慈悲にも再び指を動かし始める。人差し指も増やして膣口に三本まとめて突っ込んだ。ぐちよぐちよに泥濘んだ膣壁を掻き分け奥へ奥へと進む。指が届く最奥まで到達するとバラバラに動かし始めた。膣壁を擦られ、子宮口を長い指でコリコリされる度に静馬の腰が浮く。

「ふあああっ！ あっ、ああっ……あんっ、うあああっ！ あっ、はああああんっ！ や、

やめれえ、ひああっ！ んぐううううっ！ だめ、だめえっ、それだめえ、おかしくなる、おかしくなるううっ！」

「だからおかしくなりなっ！」

男は膣内を弄るのは反対側の手を静馬の腹部に当てる。今日最初に良さを教えてやった体外からのポルチオ責め。根本まで指を深く埋め込み子宮頸部に触れた状態で外からも同時攻撃してやる。ぐにゆりと指の腹が柔らかい肉を押し潰す感触が伝わってきた。ぐりぐりと円を描くように愛撫したかと思えば、指先でトントんとリズムカルに叩く。強弱をつけた刺激で全体をマッサージしていく。

「んああああっ♡ ああああッ♡ んあああああッ♡♡♡」

外から圧をかけることで強制的に子宮が降りる。ただの手マンよりもっさり子宮にタッチして愛撫を繰り返した。

静馬の身体はビクビクと震え、お尻が浮き上がる。背中が仰け反り、喉が晒け出される。  
「ひやめへえええええッッ♡ んあああああッ♡♡♡ あッ♡♡♡ あッ♡♡♡ あッ

♡ あッ♡」

「頭おかしくなっ、ちんぽとまんこのことしか考えられない残念美少女になっても、俺が飼ってあげるから安心してブツ飛びな」

「んぎッ、んぎひいぎいいいッッ♡ ひい……ひい……んふうううッッ♡♡」

「またイケたね」

子供を褒める口調で男は言った。

「すっかりほぐれたし、そろそろいけるかな」

男が静馬の腰を抱き寄せ膣口に肉槍の先端を密着させた。

ぬぷっと濡れた粘膜に接触した状態から腰を突き出す。狭い膣内をこじ開けるようにゆっくりと挿入していく。初めての異物感に静馬が苦悶の声を漏らした。

「うっ、くっ、うううううううううううう」

「痛くない？」

そのまま最後までされると思ったのだろう。静馬は両拳を握り、奥歯を噛み締めて破瓜の痛みに備えた。だが男は亀頭を埋めたところで抜き差しを繰り返す。浅い位置で肉キノコの傘に膣肉を引っ掛ける。ちゅぷちゅぷと水音をさせ先っちょだけの挿入を繰り返した。

「な、なんで……うくっ、あっ、あっ、あっ」

物足りなさを感じたのか静馬が切なげに呻く。声や表情には来ると思っていた瞬間が先延ばしにされた残念さがにじみ出ていた。男のモノが欲しいという雌の本能に逆らえず腰が揺れ動く。もっと奥まで欲しいとおねだりする女の浅ましい動き。男の狙い通りだった。

ここで一気に奥まで貫いてやったらどんな反応をするだろう？ 顔に出ないよう心の中でだけほくそ笑む。だが突かない。決定的に分かりやすい形で快楽に屈服させてやる。

焦らしてやれば焦れるほど、堕ちたときの悦びは大きくなるのだ。

ぬぷっ、ぬぽっ、ぬぼおっ、ぬぼっ、ぬぼんっ、ずんっ、ずんっ、ずんっ……

少しずつ深くまで入れていく。カリ首まで埋めたらまた引き抜く。そうやってもどかしい快感を与え続ける。先端に全神経を集中し処女膜にだけは傷をつけないようにした。処女膜に関係なく奥まで突いてもらいたがる静馬と彼女の膜を守ろうとする男。なんとも奇妙に倒錯した関係ができあがる。

「はぁ……んっ……んんっ……」

「静馬ちゃんどうしたの？ 何か言いたいことがあるのかな？」

「い、いえ……」

「正直に言わないと抜いちゃうよ？」

「ま、待って！」

慌てて静馬が叫ぶ。

「どうして欲しいのかな？」

「……挿れてください」

「何を、どこに、挿れて欲しいって？」

「……お、おちんちんを私のおまんこに入れてください……」

恥ずかしそうに目を伏せながらも静馬はハッキリと口にした。よく言えましたと褒めてやりたい気分だった。彼女のようにプライドの高い女の子が『おちんちん』や『おまんこ』と口にするだけでも大変だろう。真っ白な肌が湯上がりのように色づく。顔から火が出るとはこういうことか。

だからって男は甘やかさない。自分たちが何をしようとしてるか静馬に念押しする。

「つまり静馬ちゃんは俺とセックスしたいんだよね」

「はい……」

「じゃあちゃんとお願いしないと」

「……してください」

「え？ 何？」

「私とセックスしてください！！」

「そんなに大声出さなくても聞こえるよ」

羞恥のあまり声を荒らげる静馬を優しく宥めてやる。よしよしい子だと頭を撫でた。もう我慢できないの。イッてもイッても淫紋が熱いままで、子宮も疼いて気が変になりそ

うよ」

もし両手が自由なら彼女は血が出るまで淫紋を搔きむしっていただろう。今も恨みがましい視線を自分の下腹部に向けている。

「だから早く続きをして。お願い！ セックスしてください！ あなたのおちんちんで疼きを癒やして！ あなたなら可能なのよね」

ついに静馬が懇願を口にした。男に媚びた言葉を使うのは屈辱の極みだったろう。それでも彼女は自分の願いを口に出した。男とセックスするため。ここまですればもう後戻りはできない。後は彼女が望んだ通りに動いてやるだけ。

「わかった。でもその前に約束してもらおうかな」

「なにかしら」

「俺に絶対服従すること。今日から静馬は俺の性奴隷だ」

静馬の表情が曇った。改めて己の立場を自覚させられるのは辛いものがある。

「俺は君のご主人様だよ。言うことを聞くよね。君はこれから一生、死ぬまでずっと、俺のチンポケースとして生きるんだ」

「……はい……わかりました……」

「どんなことをされても嫌がらないこと」

「もちろん」

「俺以外の人間の命令は聞かないこと」

「約束する」

「俺の許可なく勝手にオナニーしないこと」

「しないわ」

「俺の精液は全部飲むこと」

「飲みます」

条件を一つ言うたびに男が腰を突き入れる。その度に静馬の身体がピクンと震えた。強い美少女が先っちょだけでは満足できず、根本までちんぽを挿れてもらうために最低な契約を受け入れてしまう。その光景がたまらなくそそった。

最後の一つを言うために男は一呼吸置く。

静馬も次の言葉が何なのか予想がついてるようだ。きっと彼女にとって最悪で最高の一言だろう。

聞きたくない。耳を塞ぎたい。ただでできない。

静馬の心境など構わず男は言い放った。

「俺の子種で妊娠すること。避妊は認めない」



それは女にとって最も残酷な宣告であつたろう。後戻りできない人生の選択。それでも静馬は頷いた。

「それでいいです。お願ひします。私を孕ませてください」

自らの意思で子宮を差し出す静馬に男は勝利の笑みを浮かべた。

3

手錠から解放された手首を軽く振ってみる。キツく締められていたわけではないが、それでも妙な違和感が残った。

「ほら早く。ちんぽが欲しいなら自分で挿れな」

仰向けに寝転がった男が声をかけてくる。その股間で屹立する勃起は天をも支えられる太さと強靭さがあつた。あれが今から自分のナカに。静馬は過去最大級の強敵と戦う覚悟を決める。

彼の緩みきつた表情は完全に静馬を墮とし、屈服させたと確信していた。自由になつた

彼女が逃げたり、反撃したりする可能性は考慮されてない。仮にそうしたところで淫紋に魔術を封じられてる静馬では、大したことができないと見下されてもいるのだろう。

「今、行くわ」

静馬は自分から敗北ちんぽに近づくと、彼に自分のすべてを奪ってもらうために。

男の腹の上に跨るとゆっくり腰を落としていった。濡れそぼった割れ目を指で開いて照準を合わせる。くちゅうりと湿った音を立てて先端部が膣口に埋まった。それだけでピリツとした快感が走る。初めて味わう感覚なのに嫌悪感はなかった。むしろ心地いいくらいである。

静馬は深呼吸すると慎重に、ゆっくりと、確実にペニスを飲み込んでいく。男の巨大過ぎる肉柱は膣壁をゴリゴリ削って奥へと進んでいった。未経験にもかかわらず処女膜を突き破られた痛みはない。代わりにあるのは強烈な圧迫感。お腹の中を巨大な異物で満たされているという息苦しさ。それを和らげようと深く息を吸った瞬間、身体を支える力を失いストンと腰を下ろしてしまった。

ずぶんと勢いよく肉槍が膣奥に突き刺さる。突然の衝撃に静馬が仰け反った。ピクピクと身体を震わせながら軽い絶頂を迎える。そして今度は逆に倒れそうになったところを男が支えた。逞しい両腕が細い腰に回されガッチリとホールドされる。おかげで倒れる心配は

なくなつたものの、密着したことで結合はさらに深まり、亀頭が子宮口を押し上げていた。これが男の人の……。

熱く脈打つ肉棒の感触を確かめるように静馬が下腹部を撫でる。これで自分はこの男の女になつてしまつたのだと実感した。先に折れた心が続いて肉体までも支配されてしまつた。「はあッ、はああッ、うふう……はあッ、んはあッ……」

静馬は自ら腰を上下させ始めた。最初は恐る恐るといった様子だったが徐々にペースを上げていく。愛液と我慢汁が混じり合いじゅぶじゅぶと卑猥な音を立てた。柔らかなお尻がパンパンと音を立てて男の下腹部を叩く。

「う、上手いね。まさか、こんなことまで、素質あるなんて、思わなかつた、よッ!」

男は切れ切れない呼吸の合間に静馬を褒める。自分の拙いセックスで彼も感じてくれているのだと思うと静馬の気持ちも昂ぶる。より激しく腰を振つた。

「あ、あ、あああッ♡ あッ♡ あんッ♡ あッ♡ んんッ♡ あ、熱い、大きい、んふッ、んくうッ、んあああッ♡」

快楽に身を委ねれば委ねるほど、静馬の感度が増していく。淫紋に侵された蜜壺が粘っこの本気汁を溢れさせる。身体の奥底から熱が湧き上がって止まらない。全身が火照り、汗ばむ肌からは甘い体臭が立ち上り男を誘つた。

「こんなにされたら俺も我慢できなくなるじゃないか」

そう言うとも男は下から突き上げ始める。ズンツと重い一撃に静馬の身体は浮き上がった。そのまま何度も何度も打ち込まれる度に絶頂へと近づいていく。

「イクっ！ もうイっちゃうう♡ お腹の奥キュンキュンしてイクそうなのおツツ♡」

全身を痙攣させながら達する寸前——男の手が彼女の腰を掴み、突如その動きが止められた。

「えっ？ なん、で？」

楽しい遊びの途中でおもちゃを取り上げられた子供のように静馬は狼狽する。なんで、どうして、イケそうなのに、今日一番すごいのがきそうなのになぜ意地悪するのよ、イカせてよ。静馬は細腰に力を入れるも男の腕力のほうが強く、腰を振らせてもらえない。

「言い忘れてたけどこの淫紋、ナカ出しされたら魂にまで焼きついて何をしても解除できなくなるからね。逆転の目は完全になくなるよ」

なぜ今ごろそんなことを言うの。どうだっていいじゃない、だって私はもう——  
「膣内射精してっ！ お願いつ！ 私の中に出してっ！」

あなたの性奴隷になると決めたのだから。

「東雲静馬は一生あなたの性奴隷として過ごします。おまんこ使い放題、ナカ出しし放題、

孕ませ放題でいいからあー!!」

静馬は叫んだ。もう自分が何を言ってるのかも理解していない。ただ本能のままに淫らな言葉を口走っていた。彼を誘惑してピストンしてもらおうことしか考えられない。

「そこまで言うなら仕方ない、なっ!!」

ズドンと、これまでで一番深いところに突き入れられた。子宮口が押し広げられ、亀頭が女体の奥にめり込む。その瞬間、静馬の中で何かが弾けた。視界が真っ白に染まる。強烈な刺激に襲われて意識が飛びそうになった。

しかしそれは許さないとばかりに男が責めてきた。下から腰を突き上げ半死半生の静馬を追い詰める。少女の軽い身体が跳ね上がり、着地すると小ぶりなお尻が男の腰にぶつかるパンパン音を地下室に鳴らした。

男の手が静馬の尻を鷲掴み、子宮口をこじ開けるようにぐりぐりとねじ込んでくる。そのたびに膣奥全体がビリビリ痺れた。あまりの快感に呼吸が止まりそうになる。まるで陸の上で溺れているようだ。苦しくてたまらないはずなのにそれがたまらなく気持ちよかった。もっとして欲しいと思ってしまう。

「これが静馬ちゃんの欲しかったおちんちんだよ。大人の本気おちんちん気持ちいい?」  
分かりきった問いに静馬は何度も首を縦に振る。

「うん、うん、おちんちん最高です♡ 大きくて固くて遅しくて……こんなの味わったら女の子は、みんなあなたに夢中になるわぁ♡」

蕩けきった顔で叫ぶ静馬に男は満足そうに笑った。

「だったらこのままイッチャおうか。俺もそろそろ限界だし、静馬ちゃんも欲しいでしょ」  
「はいっ、ください。私のナカにいっぱい出してください」

「それじゃあ遠慮なく」

静馬の身体を固定したまま男が腰を振り出す。その激しい動きに合わせて静馬も腰をくねらせ、さらに自分からも積極的に動いた。

「あぁッ、凄い、しゅごい♡♡ あぁッ、これ、いい、気持ち良すぎちゃう♡♡♡」  
もはや取り繕うこともなく静馬は喘ぎまくる。その表情は普段の彼女を知る者が見れば別人かと疑うほど淫靡だった。

ぐちゅぬちゅと粘着質な水音が響くたび二人の興奮は高まっていく。互いの息遣いが激しく交わる。

「あんッ♡♡ あッ、あッ♡♡ こんなのはじめてええ♡♡ だめ♡♡ これだめ♡♡♡  
あうッ♡♡ あぁッ♡♡ おかしくなりゆう♡♡♡」

「これがセックスなんだ。ほら気持ちいいだろ？ もっと乱れたところ見せて」

「あ……ッ♡♡♡ はあ♡♡♡ はああ……これえ♡♡♡ んッ、あ♡♡♡ 気持ちいいッ♡♡♡ セック  
ス好き♡♡♡ んッ、んああ♡♡♡」  
やがて二人は同時に果て、静馬は自分の中に大量の精液が注がれるのを確かに感じたの  
だった。

4

「ほら、休んでないで次行くよ」

再び静馬がベッドの上に押し倒される。休む間もなく次の体位を取らされる。犬猫のよ  
うに四つん這いにされ背後から男が近づいてくるのを待った。

「静馬ちゃんはお尻も綺麗だな」

菊紋もナカ出し精液が垂れる膣穴も丸見えな場所から男が言った。

「そんなに見られると恥ずかしいわ」

恥じらいを口にするものの抵抗はしない。むしろ早く挿れて欲しいと言わんばかりに尻

を振る始末だ。

「じゃあ挿れるよ」

ずいゆっと音がして男のペニスが再び膣穴に飲み込まれた。直前に射精したとは信じられない硬さのペニスが男女の体液カクテルで満たされた膣内に再突入した。

「あんっ♡♡ また入ってきたぁ♡♡」

歓喜の声を上げる静馬だが、まだ足りない。こんなものじゃ全然満足できない。彼女は催促するようにおねだりする。

「もっと動いて……激しくして……」

その言葉に男は頷くと抽送を開始した。さっきよりも速く力強いストローク。肉と肉がぶつかり合う音が室内に響く。

「んっ、ふぁっ、あぁっ、あっ、んんっ、やぁあん♡」

リズムカルに抑えた嬌声を上げる静馬だったが、それも長く続かない。すぐに余裕をなくしてしまう。男のペニスは的確に女の弱点を責め立ててくる。一突きごとに意識を飛ばされそうになるほどの快感に襲われる。

それでも静馬は意識を繋ごうと耐えた。彼が与えてくれるものは全て受け入れたかった。一瞬とて無駄にはしない。



いじらしい乙女の忍耐は男に試される。唐突に男が静馬のクリトリスを指で摘んだのである。敏感な部分を責められ、たまらず悲鳴を上げる。

静馬が悶えている間も男は指を動かし続けた。指先でクリクリとこねくり回したり、軽く引つ張ったり、あるいは押し潰したりする。そのたびに静馬は身体を震わせる。

「あぁあぁあぁ♡ いっちゃ♡ クリが♡ いぎまずううう！ ふぎいいいいいい！」  
バックから突かれ、同時にクリトリスを弄られる女にしか分らない快感。淫紋の快感が両方いっぺんにやって来るのだ。彼女の頭はおまんこ気持ちいい、おちんちん硬い、くり弄り上手すぎる以外のことは考えられなくなる。

悶絶しながらも静馬は自分から尻を押しつけた。未経験少女が見せた天性の動き。

一を聞く間に、百を調べ、千を理解し、万に応用できる静馬の才覚はセックスでも存分に発揮された。かつて家族との不和を呼んだと長く悩みの種でもあった静馬の天才性が、今は彼女に愉悅を与える。

セックスってこんなに楽しいものだったのね。

静馬は淫紋が発する熱で惚けた頭で考える。知識としては知っていた。男女が性器を結合し擦り合わせると強い快楽が発生する、時にハマり過ぎて他のことがなおざりになって

しまうくらい気持ちいい。だが実際に体験してみてもようやく実感できた。セックスってなんて素晴らしいのだろう。こんな素敵なことを今まで知らなかったなんて自分は愚かだったとさえ思う。

セックスで得られるエクスタシーは麻薬に似ている。一度味わってしまったえば二度と抜け出せない底なし沼だ。セックスに溺れ墮落していく人間を今の静馬は笑えない。

もう何も考えられない。ただ目の前の快楽を貪るだけの雌になり下がる。それでいいと思った。だって今の私はこんなにも幸せなのだから。

「ああっ♡ 気持ちいい♡ 凄く気持ちいいの♡ ああっ♡ あああんっ♡ クリトリス撫でられながら後ろから突かれると♡ 頭バチバチするっ♡ んんあああっっっ！ イツクううううううっっっ！」

静馬は絶頂を迎えると同時にイキ潮を吹いた。こんなに何度も吹いて身体の水分が残らず出てしまうのではと今日さえ感じる。それでもオルガスムスの印は止められずシートがビショビショに濡れる。

「あはは、派手にいったなあ」

男は笑いながらも腰の動きを止めることはない。それどころか彼女の腕を引っ張り、グイッと身体を起こすとより激しく責めてきた。正座する彼の膝に乗せられた静馬は極太の

亀頭で子宮をグリグリと可愛がられた。

「んひい♡ 待って、今イッてる、からあ♡ 敏感になつてるのお♡」

絶頂直後で辛いはずなのに、女体は悦びに震えるように反応する。自分の体重がかかり先ほどよりも深くまで突き刺さる。子宮口をよしよしされると脳髓にまで響くような衝撃が走った。

「やだあ、これ怖いよお♡」

未知の感覚に怯えながらも静馬の表情は蕩けきっている。口の端からは涎を垂らし、焦点が定まらない瞳で虚空を見つめていた。そこに普段の凜とした少女の面影はない。あるのは浅ましく快楽を求めるメスだけだ。

「おほおほおほおっ♡♡♡♡」

獣のような咆哮を上げて静馬が達した。仰け反りながらビクビク痙攣している様子はとも見せられたものではない。これがあの平素は凜然とした美少女と同一人物かと見た者は我が目を疑うだろう。それほどまでに今の静馬は乱れていた。

「静馬ちゃんまたイッちゃったね。だけど俺はもう少しかかるんだ」

絶頂の余波に浸る暇もなくピストン運動が続く。今度は男が脚を伸ばし、後ろに手をついての背面座位。彼が腰を突き出し背後から洪水状態の膣内をちゅこちゅこちゅこと突いてくる。





「あひいっ♡ またっ♡ またイクッ♡ イグイグイグイクうううう♡♡♡♡ あ  
なのおちんちんで私、イカされちゃうううう♡♡♡♡」

「俺もそろそろ出るよ！ 静馬ちゃんの膣内に出してやるからな！」

「出してっ♡ 精液いっぱいちょうだい♡ 孕むから♡ 性奴隷の務めであなたの赤ちゃ

ん産むから♡ だからお願い♡ 全部私に注いでええ♡♡♡」

「言われなくてもそうするよ！ 一滴残らず子宮に注ぎ込んでやる！」

「きて♡ きて♡ きてきて♡ ああっ♡ 熱いのきたああっ！ 奥にビューって出て  
るうう♡ ああっ、ああっ、すごい……しゅごい♡♡♡ こんな知ったらもう戻れ  
ないいい！ ずっとこうしていたい♡♡♡」

二人はそれから何度も何度も交わった。お互いに体力の限界まで求め合い、最後にはど  
ちらも満足に動けないほど疲れ切っていた。

半ば寝落ちしかけた状態で静馬は男の股間に顔を埋める。自分を女にしてくれたちんぽ  
に感謝のお掃除フェラ。経験などない少女の見様見真似な拙いフェラにも男はいちいち感  
動してくれる。

「静馬ちゃんはいいい子だね。これからも俺のために尽くしてくれ」

頭を撫でられて静馬は恍惚となる。嬉しい、褒められた、とても幸せだ。この人の側に

いられるのならなんだってできる、何だっしてあげたくなる。顔を大きく動かし、長大なペニスを根本から先端まで唇で愛撫した。

「あ、む……んん、ふ、ちゅ……はぷっ……ん、んくっ……ん、う……んう、ちゅ……じゅる……ちゅば……んちゅ……れる……ちゅばっ……」

ペニスの先端を咥えたまま尿道に残った精子を吸い出す。苦味の中に癖になりそうな甘美さを秘めている。ゴクリと喉を鳴らし飲み込んだ。裏筋を舌先でなぞり、カリ首を重点的に責め立てる。深い溝に残っている精液カスも綺麗にしてあげる。

「あっ、うぐっ、それいい、すごいいよ」

男が悶えているのを見て静馬の胸がキュンとする。私はもう完全にこの人の虜になってしまった。

静馬が口を離すと唾液が糸を引いて切れた。彼女はベッドから降りると裸のまま床に土下座する。そして額を擦りつけて言った。

「ご主人様、どうか今後も末永く可愛がってください」

それは彼女が心から望んだこと。淫紋に支配された少女は従順な雌犬として生まれ変わったのだ。

男が言うとおりにナカ出しで定着した淫紋は時間が経っても消えなかった。あれから二週間経った今も静馬の下腹部で怪しく光っている。

淫紋の効果は静馬が考えていた以上に多彩だった。男と毎日ナカ出しセックスを楽しむようになり三日で彼女の胸は以前よりも一回り大きくなった。淫紋の効果の一つに女性ホルモン分泌促進があつたようだ。それによりバストアップとヒップアップが実現した。単に大きいだけでなく形も美しく整っている。まだ巨乳と言える大きさではないが今後も育つなら、いずれはDカップくらいまで成長するかもしれない。

己の容姿には自信ある静馬だが肉付きの薄さには一抹の不安もあつた。果たしてご主人様は貧相な身体をいつまでも未永く愛してくれるだろうか、途中で飽きてしまうのではないか。自分の胸も雨森穂波くらい大きければいいのに。そんな彼女の願望も淫紋はすくい上げてくれたのかもしれない。

これには驚くべき別の効果もあつた。乳房に脂肪が集まったことで乳腺の発達が起こり母乳が出るようになったのである。その量たるやコップ一杯を軽く超えた。まだ妊娠もしないのに乳頭から白く濁つたおっぱいミルクが出てくるなんてと最初は驚いた。しかし



彼が喜んで吸い出してくれるため今では静馬も授乳プレイがお気に入り。授乳手コキで彼の逞しい竿や大きなタマタマを手で転がし、お互いのミルクを交換するのが日課となっていた。

最初は恥ずかしさもあった。だが何ごとにも慣れた。回数を重ねるごとに羞恥心は薄れ、彼の興奮してる息づかいや乳首から勢いよく母乳が噴出する気持ちよさのほうに優る。

こんな身体になってしまっただけは日常生活に支障を来すと不安を抱いていた彼女だが、案外どうにかなるものだと思っただけ。ほとんど外に出ず一日中セックスばかりして過ごすのだから支障になりようがないとも言えた。

問題があるとしたら、自分でも制御不可能なほど淫乱になってしまったことだ。ふとした瞬間に腹の奥が切なくなつて何も挿入してないことが心もとなくなる。だけど男の命令でオナニーは許されていない。静馬の身体は全てご主人様に捧げたのだ。たとえ彼女自身とておまんこを勝手に触ることは裏切りとなる。

その代わり彼女が性奴隷として使える主人は寛大で飼いな上に絶倫だった。静馬から「ムラムラして我慢できない卑しい雌犬に、ご主人様のおちんぽをお恵みください」と土下座して頼めば、二十四時間いつでも膣内射精セックスしてもらえた。おかげで彼と一緒に住むようになってから静馬の子宮は常にナカ出し精液で満たされている。この生活に

慣れてしまつたら元の暮らしに戻るなど不可能だ。

もし彼に捨てられてしまつたら私は生きる氣力をなくしてしまふだろう。

恐ろしい未来を想像すると漠然とした不安に襲われる。そうならないためにも静馬は寢室で彼が望む理想の雌を演じる。擦れ違つた者が振り返らざるにはいられない凜然とした美貌はそのままだに、二人っきりのときは思いつきり甘えて淫らに尽くす、ご主人様だけの美少女淫乱痴女メイドになるのだ。

「あんっ♡ もう♡ またですか？」

今も静馬は以前の彼女からは信じられない雄に媚びた声を出している。風俗店でしか見ないような超ミニ丈のメイド服から美脚を伸ばし、大きく抉られた胸元からは成長した胸を誇らしげに露出させている。周囲の人間を拒絶し、絶対零度の冷気を放つていた時期の静馬を知っている人間ほど、あの東雲静馬の変わり果てた姿に劣情を催してしまふだろう。

ベッドの上で四つん這いになった静馬の背中に覆い被さるようにして男がイチモツを擦りつける。彼は服を着ていない。いつでも静馬がセックスしたくなつたとき抱いてやれるようにと家の中では全裸で過ごしているのだ。なんて優しいご主人様なのだろう。一方で静馬には日替わりで様々なコスチュームを着せたがる。今日はメイド服だが昨日はチャイナドレス、その前はナースの格好をさせられた。だが何と言つても彼がお気に入りなのは

学校の制服姿。静馬を見初めたときの格好で抱くのが一番興奮するらしい。制服エッチで彼のおちんぼは太さ、硬さとも一段階アップする。

勃起度百二十パーセントになった彼のペニスでズコズコしてもらおう気持ちよさは病みつきになる。毎日制服エッチしたい。ただ、どれだけ好きなメニューでも毎日食したら飽きがくるもの。他の衣装とローテーションする頻度が丁度いいのかもしれない。

超絶ミニのメイド服で雌犬ポーズを取ると静馬の尻は剥き出しとなる。黒のガーターベルトが肌の白さを際立たせる一方で、肝心の下着は身に着けていない。背後に回った男の目には濡れた割れ目がぼっくり映っている。その割れ目に男が問答無用で侵入してきた。

「あうっ♡ おっ♡ んっ♡ いきなりっ♡ そんなっ♡ あああっ♡」

「静馬ちゃんだっけ欲しかったんでしょ？ ほら、俺のおちんちん美味しいって言ってごらん」

「はいっ♡ はいっ♡ ごしゅじんさまのおちんちんっ♡ とってもおいしーいれすうっ♡ もっと♡ もっとお♡ 私のナカにくださいっ♡ あああっ♡ んあああああっ♡♡♡」

バックからの激しいピストン運動に静馬は歓喜の声を漏らす。嬉しくないはずがない。今日も朝からムラムラしっぱなしなのに、ご主人様だったら仕事があると言って一人で出か

けてしまったのだ。飼い主の帰りを待つ間も従順な性奴隷ベックトの静馬は隠れオナニーなどせず、発散させる場がない性欲を持って余したまま大人しくしていた。待ち望んだものがようやく与えられた悦びに子宮がキュンキュン疼く。自分でも分かるくらい膣洞がギョルギョルうねってちんぽを歓迎している。

「ああ♡ いい♡ これいい♡ おちんちん気持ちいいです♡ あああ♡  
こお♡ 奥♡ 子宮突かれてるう♡♡♡ ああ♡♡♡ すごい♡♡♡♡♡  
んさまああ♡♡♡」

腰をくねらせながらよがり狂う静馬に男は満足げな笑みを浮かべる。可愛いよ、最高だよと褒めてくれる彼の言葉だけで軽く達してしまいそうになる。子宮口と亀頭がキスするのが分かる。子宮が降りてきてる証拠だ。赤ちゃんの部屋が犯されたがってる。早く孕ませてほしいと訴えているんだ。

「ねえ静馬ちゃん、そろそろ赤ちゃんできたかもね」

彼も同じことを考えていてくれたようだ。二人の間に生まれるであろう子供に言及した。まだ見ぬ我が子への想いを語る男の声は優しかった。だがペニスは容赦なく子宮を突きまくっている。静馬は喘ぎ声を上げながらも頷いた。淫紋には排卵を促す効果もあるらしい。静馬のナカに注がれた子種は無駄にならない。

「いっぱいナカ出ししてください♡ 子供のためにも一滴残らず精子を注ぎ込んで♡」  
その言葉に応えるかのように男は抽送速度を上げた。力強いストロークはベッドを揺らし静馬を悦ばせる。

もうダメっ♡ もうイク、絶頂する、イッちゃう、イっちゃう——！

「イクっ、イク！ イキますっ！… あっ、あっ、イク…：…ッッ♡ あ♡ あっ♡ あっ♡ あっ♡  
あああああ~~~~ッッ♡♡♡」

逞しいおちんぽに負けながら昇天させられる。それこそ女の幸せだ。自分は気持ちよく負けて赤ちゃんを産ませていただく側の性別に生まれたのだ。全身を痙攣させ静馬は幸福感に酔いしれる。もう絶対に離れられない。この人なしの人生なんて考えられない。このまま一生可愛がってもらうのが静馬の望みだ。

イッても静馬は許してもらえない。女の絶頂を無視した男のピストンは続く。静馬もそれに応えようとす。より強い快感を求めて自らお尻を振りたくった。結合部から愛液が飛び散る。シートがぐしょ濡れになってることも気にせず二人は愛し合う。

「静馬ちゃん自分からお尻を押しつけてきて偉いね。ぐにゅーって強く押し当てたまま、の字を描くように回してご覧。俺のちんぽ使って自分で子宮コネコネするんだ」

言われたとおりにした静馬はあまりの快感に失神しかけた。自分で気持ちいいところに



それを何度も繰り返し、肉棒で膣内をかき回す。肉襞の一枚一枚が捲られ、絡みつき、締め付けて、男を射精へと導く。男も今度こそ静馬と一緒にイクつもりで彼女の柳腰をガツチりつかみ、肉付きがよくなって突き心地が増した女尻に腰をぶつける。

パンパンパンツと乾いた音を響かせ、男と静馬は共に高みを目指す。

「くっ、出さず、静馬ちゃんのおまんこに、全部、ぶちまけてやるからな、しっかり受け止めろよ、く、おお、おおおっ！」

「はい、きて、きてください、ご主人様の精液、私のナカに注いでください、ああ、あああ、ああああ、あああああああー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！」

一際深く突き刺さった瞬間、静馬のナカで熱い奔流が迸る。それは瞬く間に子宮を満たし膣内を白く染め上げた。

同時に静馬も絶頂を迎える。脳髓を溶かすほどの強烈なオーガズム。目玉がぐりんと回り、意識が飛びそうなほどの衝撃。身体を弓なりに反らして声もなく悶えた。あまりの気持ちよさに脊髄反射で喉奥を締めてしまい言葉が出ないのだ。

肉襞の一枚、一枚に精液を塗り込もうと男が腰を前後に揺らす。その動きを感じながら静馬は絶頂の余韻に浸った。

やがて全てを出し切った男が萎えかけたモノを引き抜く。栓を失った秘所から白濁液が

溢れ出た。せっかく注ぎ込まれた子種をこぼさないようにと静馬は膣口をきゅっと締めた。大好きなご主人様の子種がお腹の中で泳いでいる。そう思うだけで静馬は幸せな気分になれた。自分の中に新しい命が生まれようとしていることを感じ、彼女は下腹部に手をやるのだった。